生徒の自分づくり，夢づくりのための組織的な教育活動の展開

－信頼関係の構築を基軸とする学校組織マネジメントを活用して－

研修機関 鳴門教育大学大学院 学校教育研究科 高度学校教育実践専攻 学校・学級経営コース 佐古研究室
黒潮町立大方中学校　教諭　明神　通恭

1　はじめに

(1)　高知県の教育課題とその構造についての考察

高知県では改善すべき喫緊の教育課題として深刻な中学校の学力問題と非行・いじめ・不登校などの学校不適応の問題が指摘されてきた。そして平成 20 年 7 月より「学ぶ力を育み　心に寄り添う　緊急プラン（学力向上・いじめ問題等対策計画）」を策定して改善に取り組んできた。これまでの取組の成果として平成 24 年 3 月に新たに示された高知県教育振興基本計画重点プランの中で、上記の諸問題は改善傾向にあると記されている。しかしながら、不登校をはじめとする生徒指導上の諸問題は依然として多く、中学校の学力も全国平均を下回っており、未だこれらの教育課題の根本的な改善には至らず、厳しい状況が続いていることも明らかにされている。

県をあげての取組にも関わらず教育課題の抜本的な改善に至らない理由について考察すると、第一には学校組織の個業化に関する課題、第二には対処療法的な方策の乱立による課題の二つが指摘できる。

第一の課題は個業型組織である学校の限界である。これまで学校は授業や学級経営など中核的な課業を個々の教員の力量に委ねてきた。つまり学校組織内における主要な教育活動は教員という「個人事業主」の頑張りや想いに支えられてきたということである。しかし、学校が多忙で閉塞的な状況に陥ると組織として機能することが困難となり、個々の教員の経験や知識などの力量に依拠して教育活動が遂行される傾向がさらに強くなってしまう。そして各教員が自ら担当する範囲・領域における教育の最適化を追求する「部分最適型の学校」になってしまうのである。このように個業化によって学校全体の教育活動の改善がなされにくい状態に陥っていることが課題である。

第二の課題は対処療法的な教育活動の乱立である。これまで多くの中学校では直面している生徒指導上の問題や学力の問題を解決する為に、効果のありそうな方策を次々に導入し取り組んできた。しかし、これらの方策はそれぞれ別個の問題を解決するために導入されるので、教員は多くの方策を並行して行わなければならなくなり、結果として『取組をこなす』ことに追われる多忙な状況が生じている。言い換えると、低学力・いじめ・不登校など目に見える課題に対して、モグラたたき的に方策を導入することにより、多忙な状況の中で教員相互の協働性が失われて、学校の教育力が弱体化してしまう事態が生じているということである。

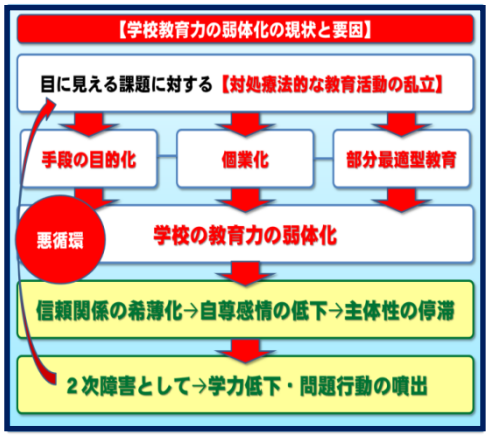

図１　学校教育力の弱体化の現状と要因

(2)　本研究における教育課題改善に向けての方向性

対処療法的な教育活動の乱立を起因とした教育力の弱体化を改善するためには、目に見える様々な問題にとらわれるのではなく、何がそれらの問題を引き起こしているのかという問題の根底にある中心課題を明らかにする必要がある。そしてそこから目指す生徒像（基本課題）を明らかにし、それに到達できるように教育活動の整理を行って体系化しなければならない。つまり教職員が生徒の基本課題に関するベクトルを共有し、学校の取組課題を明確にすることである。この際に重要になるのが「教育活動を何に基づいて体系化するのか」である。

本研究においては、教育改善の方策を系統的に整理するための根拠となる概念(理論的裏付け)を生徒の成長プロセスと捉え、置籍校の生徒の実態に依拠した「生徒の成長のプロセスに基づいた教育改善プログラム」を策定し、同時に学校組織開発理論を導入して学校の自律的な教育力の向上を目指した。

2　研究目的

高知県の教育課題である中学校の低学力の問題やいじめ・不登校などの学校不適応の問題の要因について構造的に分析し明らかにすると共に、大方中学校をフィールドとして学校組織開発理論を導入し「生徒の成長のプロセスに基づいた教育改善プログラム」を組織的に展開することを試みる。

これによって生徒を中心とした信頼関係を構築し、それを基盤として生徒の自己信頼感・自己効力感の形成を図り、自尊感情を高めることを通じて主体性の醸成に迫ることを本研究の目的とする。

また同時に組織開発を行い、全教職員の参画によって教育活動の良循環サイクル（RPDS サイクル）を協働的に実現していけるようにマネジメントを行う。これによって教員の自律性と学校の組織性の改善を図り、個業化を縮減して学校の自律的な教育力を向上させることを本研究の目的とする。

3　研究内容

(1)　実践研究の概略

実践の展開を端的に示すと図２のようになる。

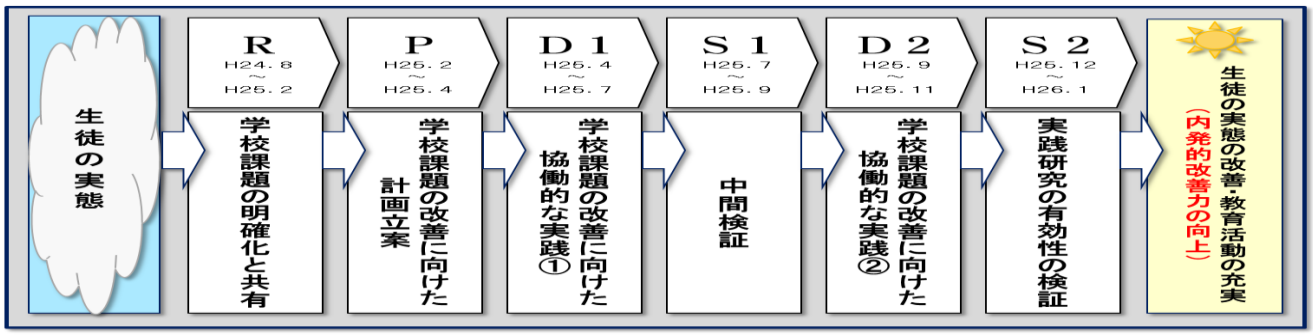

図２　実践研究の概略

(2)　Research 期（H24.8～H25.2）

ア　目的

・客観的なデータをもとにアセスメントを行い、大方中学校の課題を明らかにすると共に、教員間で実態についての認識を確認・共有し、その中心的な問題を探る。

・生徒の中心的な問題から基本課題を明らかにし、具体的な取組課題と方向性を確認する。

《アセスメント資料》
①全国学力・学習状況調査および質問紙調査(H21～H24)
②Q-U(H24/5,10)
③Σ調査(H24)④学校評価(H22～H23)
⑤追加アンケート(H24/12)
⑥教員アンケート(H24/12)⑦インタビュー(H24)

イ　大方中学校の課題のアセスメント

フィールドワークに先だって、大方中学校の実態を分析･把握するために､資料の収集を行った。

これらのデータのうち、平成２４年５月と１０月に行った Q-U を比較検証すると５ヶ月の間に数値が急激に落ち込んでいる項目や改善が見られず低位停滞している項目が見出された。

それらをキーデータとして問題の傾向を先行研究に基づいて構造化すると以下のようになる。

①多くの生徒に、中学校での学習や生活を経験するにしたがって承認感の低下・信頼関係の希薄化・自己存在感の低下が生じている。

②その結果、自己信頼感が低下して、学級活動への参加意欲や学習意欲が停滞し、主体性が発揮できなくなっている。

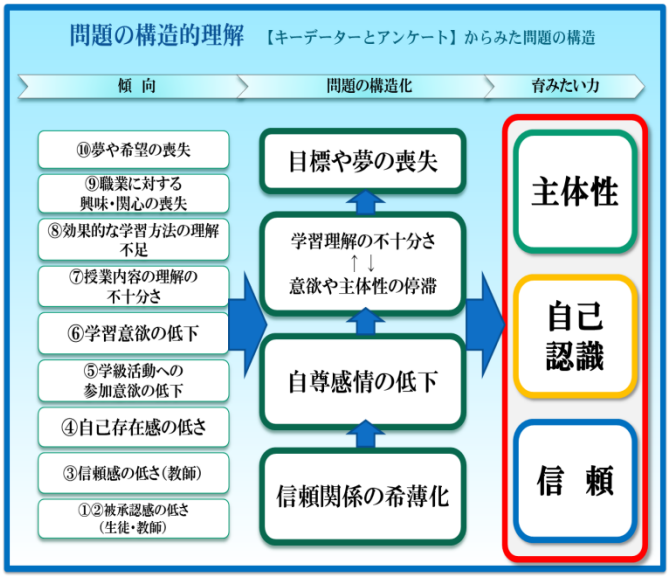

図３　大方中学校の問題の構造

③このような意識が授業や学習方法の理解にも影響を与え、　　職業

への興味関心と将来の夢や希望の喪失につながっている。

この実態を明らかにするために追加アンケートを作成して平成 24 年 12 月に実施し、上記の問題の進行を確認した。

また同様に作成した教員アンケートから教員の課題を考察すると以下のようなことが指摘できる。

①多くの教員が、教育目標や取組の決定過程に参画していないため「他者の決めた目標や取組を“こなす教育”」すなわち他律的な教育活動が実践されている。

②そのため教員に内発的な動機が生じにくく、個業化が進行して部分最適の教育に陥っている。

③組織内に形式的なコミュニケーションは成立しているが、教員相互の信頼関係に基づくものではないので、結果的に組織的教育活動の活性化には結びついていない。

ウ　学校課題の明確化と教職員による共有

以下のプロセスを経て、実態の把握・認識の共有・中心課題と基本課題の明確化と共有を図った。

表１　中心課題と基本課題の明確化と共有のプロセス

内容	時期	具体的実践
生徒の実態の認識の共有	H25.1.30	整理した学校アセスメント資料を基に研修を行い、生徒の実態を全教員で確認した。
生徒の課題の分析と共有	H25.2.13	アセスメント資料を再度提示たうえで、WS型研修を行い、データと教員の実感を摺り合わせて生徒の中心課題について意見収集を行った。
中心課題と基本課題の明確化	H25.3.7	教員から出された意見を基に企画委員会で検討して、生徒の実態傾向から中心となる課題を見出し、目指すべき方向性となる基本課題を明確にした。
中心課題と基本課題の共有	H25.3.18	全教員から出された意見の集約を示し、企画委員会で検討された中心課題と基本課題を提案の上確認し、課題の共有を図った。

エ　成果

全教員の参画によって、自校の生徒の中心課題「周りに依存してしまい，自分のよさを発揮できない主体性のなさ」が明らかにされ、基本課題（目指す方向性）「自らを律し，主体的に行動できる生徒の育成」を形成することができた。これによって自律的な教育の基盤が成立したと考える。

(3)　Plan 期(H25.2～H25.4)

ア　目的

・生徒の実態と成長のプロセスに依拠した具体的な教育改善方策を策定する。

・全教員が改善方策の策定過程に参画することで共有を図り、実践化に向けてベクトルを揃える。

イ　生徒の成長のプロセスに基づいた教育改善方策の方向性

生徒の成長のプロセスに基づいた教育改善方策の基本的な方向性として以下の点を確認・共有した。

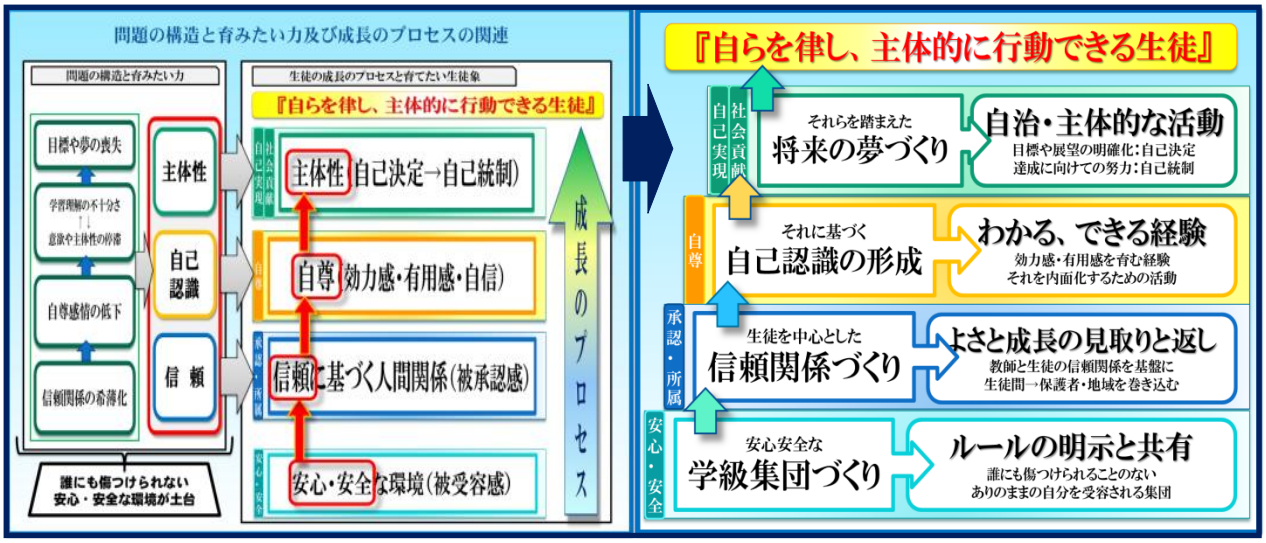

図４　構造化した問題と生徒の成長のプロセスの関連及びそれに基づいた教育改善方策

① 安心安全な環境の保証と信頼関係の構築

主体性形成のためには、自分に依拠して意欲を持って活動するための基盤を構築しなくてはならない。ゆえにまずは安心安全な環境を保証し、生徒を中心とした信頼関係を構築する。

② 自己認識の深化に基づく自信と効力感の形成

信頼関係を構築する過程で生徒の自己認識を深化させる仕組みを導入し、自己信頼感及び自己効力感などを高めて自尊感情を醸成する。また、教科指導で「やったらわかる。やったらできる」という経験を蓄積することを通じて学習効力感を形成し、意欲や主体性の発揮を促進する。

③ 生徒主体の活動による社会的効力感と主体性の形成

並行して生徒の自己決定に基づいて自治活動や社会貢献活動を実践し、それに対して他者からの価値づけを得ることで、社会的効力感を実感しつつ主体性の醸成を図る。

ウ 具体的改善方策の策定過程への全教員の参画

以上の方向性に基づいた具体的な改善方策（以下アクションプラン）の策定にあたって全教員の意見を反映させるために、校内研修(H24.3.18)において「アクションプランの取組において自らが実施すべきこと」について協議し、これを取り入れてアクションプランを策定した。

エ 効果

生徒の成長のプロセスに基づいて教育改善方策を系統的に整理して段階的に導入することが、基本課題達成のために有効であることを全教員で共有できた。また策定過程への参画によって自律的な教育改善の実践に向けて内発的な動機づけが成立した。同時に、それぞれの段階において重点的に取り組む方策を焦点化することで見通しを持った教育活動を実践できるようになった。

(3) Do 期(H25.4～H25.11)

1) 組織的基盤の整備

実践に先立って組織開発理論を導入し、学校組織の改編を行った。組織の構造は、コア・システムである学年部会を横軸に、生徒指導部会・教科指導部会を縦軸として、それを学校改善委員会（プロセスファシリテートチーム）がブリッジでつなぐ形でとなっている。また、組織を機能させるために、部会をカリキュラムに位置づけて実践の基盤を整えた。

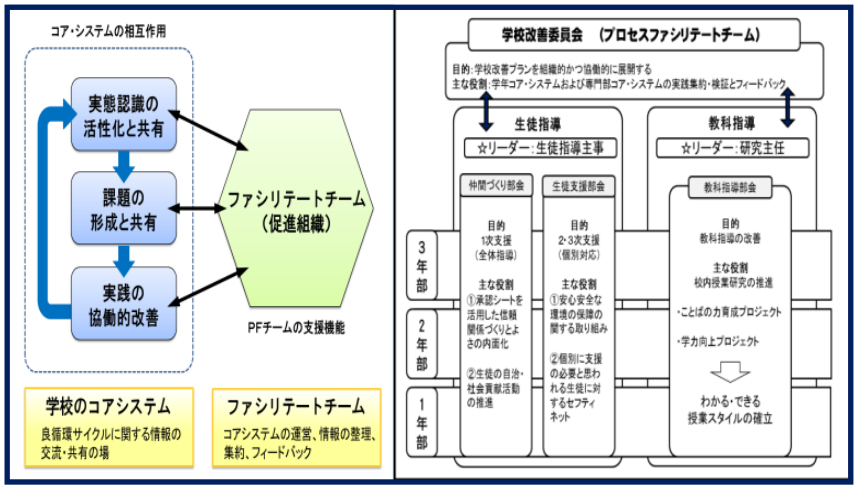

図５ 学校組織開発理論を導入した大方中学校の学校組織

2) 安心安全な集団づくり

ア 目的

ルールの徹底を図り安心安全な環境を保証することで、自分に依拠した言動のための土台を構築する。

イ 基本構成

・ネガティブリストによって生活行動面で基盤となる絶対のルールを決定し、同時に生徒の学習を保証する基盤となる授業の統一ルールを決定し、指導の徹底を図る。

・生徒会スローガンを基点としたポジティブルールを学級で話し合って自己決定し、その達成に向けて生徒が主体となって活動を展開する。

ウ 実際の運用

・絶対のルール「暴力・暴言・いじめは許さない」を入学式に全教員が全校生徒と保護者の前に立ち、【大中宣言】というかたちで告示した。また授業の統一ルール「しっかり聴こう」についても校内研

主任がその主旨を説明して告示した。この後、校内の掲示版や教室に一斉にルールを掲示すると共に、学校便りを通じて保護者にも理解と協力を促した。また生徒は失敗をしながら成長していく存在であることを確認し、行為と存在を分けて指導を行うこととした。告示後は週末学年部会で実践の成果を交流して RPDS サイクルに基づいた教育活動の展開を図った。

図６　入学式における【大中宣言】の様子

・ 生徒による取組は、まず生徒会執行部からスローガンの確認を行い、全校合同班長会をもって重点目標を設定したうえで、学級レベルでポジティブルールを決定し、達成に向けて取り組んだ。

エ　効果

全教員の参画のもとで安心安全な集団づくりのためのルールを決定し、年度当初に一斉に導入することで統一した指導が行われた。また並行して生徒会を中心にポジティブルールが決定され、その達成にむけて生徒主体の取組が活性化し規範意識が醸成された。これを通じて安心安全な環境が保証され、信頼関係を構築するための取組を導入する基盤を確立することができた。

3)　承認情報の共有・内面化システムの構築

ア　目的

・承認のためのツールを導入し、生徒の成長やよさの見取りとフィードバックを組織的に行うことを通じて、教員の省察力と協働性の向上を図る。

・承認情報の内面化を促進するツールを導入し、生徒の自己認識の深化を促して自己信頼感・自己効力感の形成を図ると共に、生徒を中心とした信頼関係を構築する。

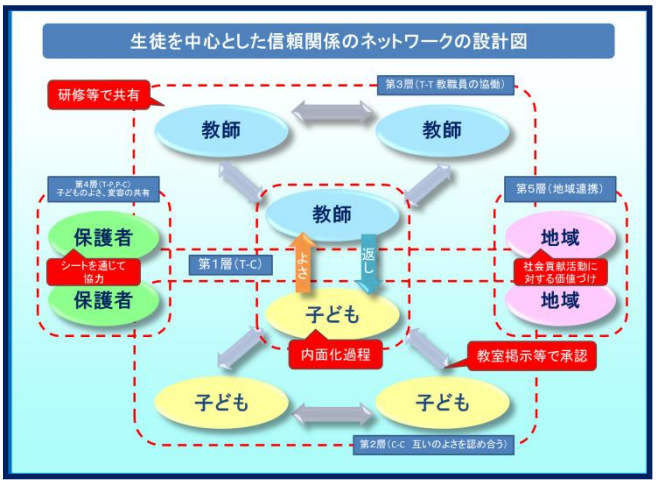

図７　生徒を中心とした信頼関係のネットワーク

イ　基本構成

(ｱ)承認を基点とした自己認識の深化と信頼関係構築の考え方

・ 最初に教員が生徒の成長やよさを丁寧に見取り、それを承認情報としてフィードバックする。

・生徒は承認情報から自分の成長やよさについて発見・確認し、自己認識を深化させ、自己信頼感と自己効力感を形成する。同時に、成長やよさに気付かせてくれた教員に対する信頼感が高まる。

(ｲ)承認情報の共有と内面化システムの構成

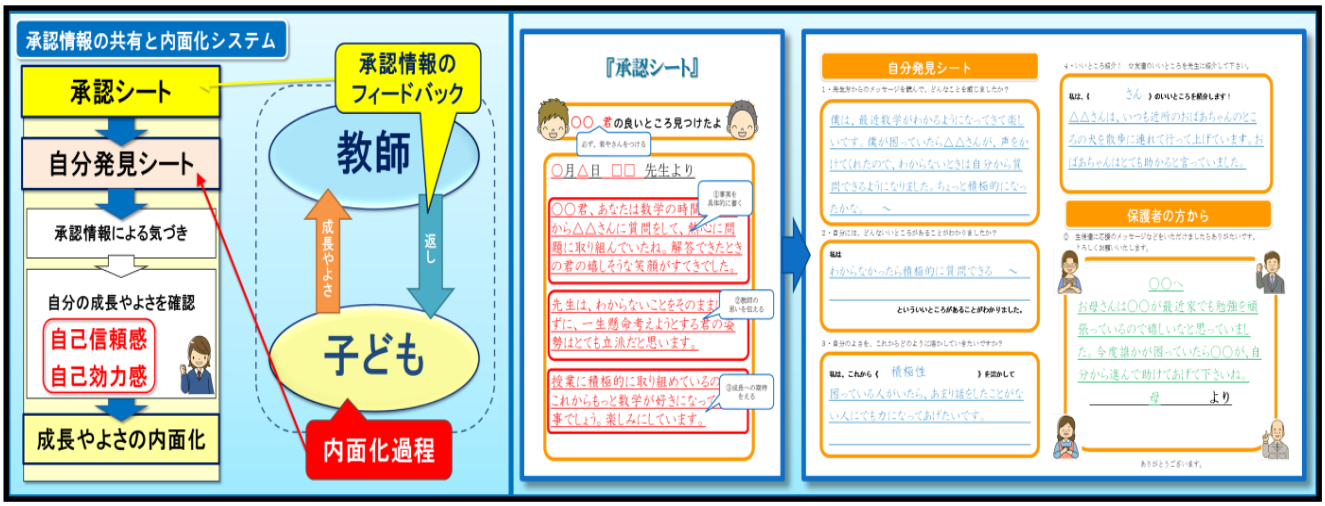

図８　承認情報の共有と内面化システムの仕組みと実践のためのツール

① 承認情報をフィードバックするツール

承認情報の内容はａ具体的な事実、ｂ教員の思い、ｃ成長期待とし、「承認シート」に記入してフィードバックする。また、コピーを教室に掲示して生徒相互の承認を促す。

② 内面化と共有のツール

内面化のツール「自分発見シート」の内容はａ承認情報の感想、ｂ承認情報からわかったこと、ｃ今後の成長目標、ｄ友達のいいところ、ｅ保護者からの応援メッセージとなっており、ａ～ｄまでを生徒が記入して成長やよさの内面化を図る。

③ 研修の工夫

校内ツアー型研修を実施し、視点生徒の成長やよさを共有し、省察やフィードバックの工夫など実践の交流を図ることで協働性を構築する。

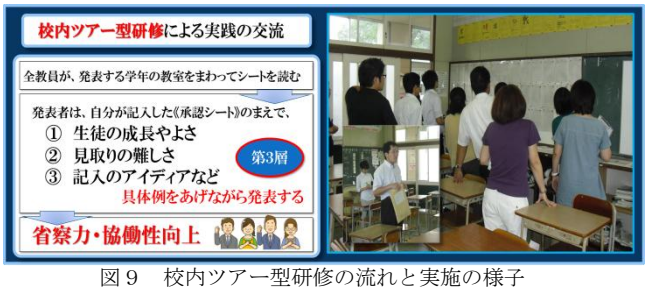

図９　校内ツアー型研修の流れと実施の様子

④ 保護者との共有

ドリームノートを介して、生徒の成長やよさを共有し、「自分発見シート」に応援メッセージを書くことで学校の取り組みに参画してもらい、信頼関係を構築する。

ウ　実際の運用

上記のシステムを年間５回（１学期２回・２学期２回・３学期１回）実施した。

またこの取組を生徒面接週間・３者面談とリンクさせ、ツールを媒介に直接承認情報を伝えることで信頼関係の構築と自己認識の深化による自分づくりの促進を図った。

4)　わかる・できる経験の蓄積による効力感の形成

ア　目的

わかる・できる経験の蓄積により，学力向上の基盤となる学習効力感を形成する。

イ　基本構成

・先行研究に基づいて学力向上の背景の理解を図り、授業の構造化を促進する。
・空き時間活用型リクエスト方式の校内研修を導入し、組織的に授業改善を図る。
・形成テストを基点に、授業と家庭学習の連環を促進する。

ウ　実際の運用

生徒の学力向上の基盤である学習効力感形成のために授業の構造化・校内研修の改善・授業と家庭学習の連環の構築に取り組んだ。

5)　生徒主体の活動による効力感の形成

ア　目的

ルーティンワーク化している生徒の活動を見直し、新たな取組を企画・運営することを通じて主体性と社会的効力感を形成する。

イ　基本構成

・生徒会執行部と全校合同班長会を中心に重点目標を生成し、その達成に向けて、これまでの行事や様々な活動を見直して新たな行事や活動を実践する。
・元気会（ピアサポートを行う任意のグループ）を中心に、社会貢献活動を企画・実践する。

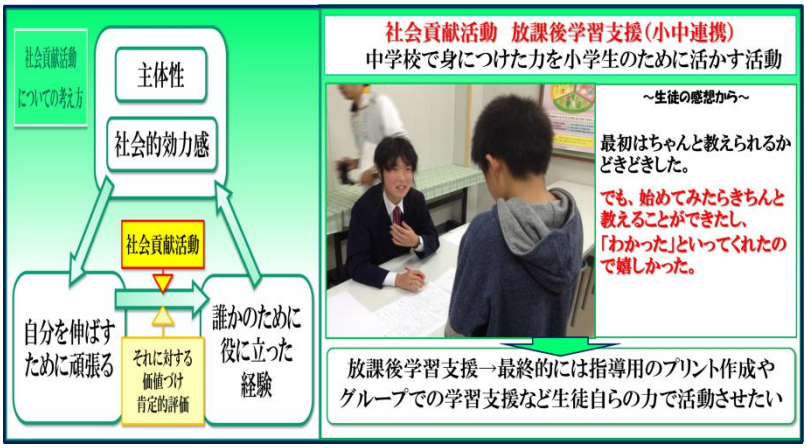

図１０　生徒主体の活動による効力感の形成の考え方と実施の様子

ウ　実際の運用

生徒の主体的な活動を活性化するために全校合同班長会を組織して学級レベルの「小さなリーダー」の育成を図った。また、ルーティン化した生徒会活動や行事を見直し「自ら創る・自ら行う行事や自治活動」に取り組んだ。

元気会（約６０名）を中心に放課後学習支援などの社会貢献活動を企画・実施した。この活動に対して、地域の方や小学校教諭から活動の価値づけをしてもらい、それを全校生徒や保護者に告知して社会的効力感の形成を図った。

(5)　See 期(H25.12～H26.1)

ア　教師の変容

①目標及び取組の形成過程への参画

肯定意見　57%→82%

②個業性の縮減・協働性の向上

肯定意見　67%→94%

③教員間の信頼（意図・力量）

強い肯定意見　31%→53%（意図）

44%→53%（力量）

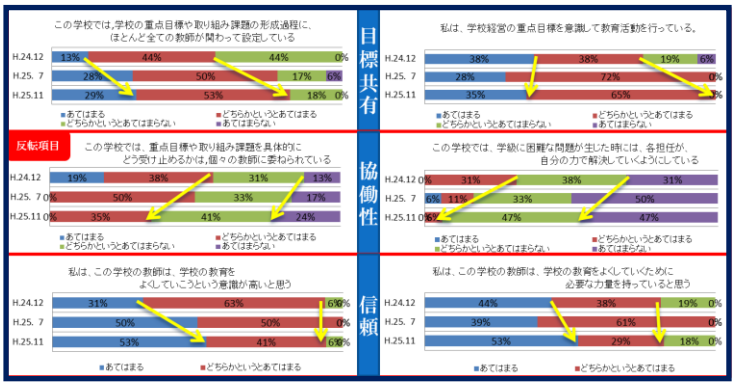

図１１　教員の目標共有・協働性・信頼に関するデータ（教師アンケート(H24.12~H25.11)

目標や取組の形成過程への参画及び主体的な実践によって、自律性が向上した。また、教育活動を組織的段階的に展開することを通じて、コミュニケーションが活性化し、協働性が促進され、信頼関係が構築された。

イ　生徒の変容

①教員からの承認：3 年強い肯定意見　＋19%　　②自己効力感：3 年強い肯定意見　＋21%

③将来の夢や希望：3 年強い肯定意見　＋16%

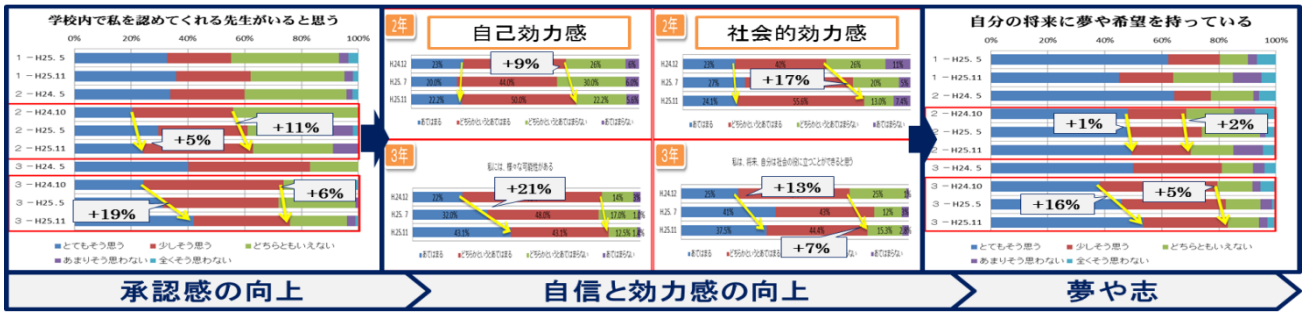

図１２　教員からの承認感・自己効力感及び社会的効力感・将来の夢や希望に関するデータ Q-U(H24.10~H25.11) 及び追加アンケート(H24.12~H25.11)

安心安全な環境と信頼関係の土台の上に立って、自己認識が深化し、自信と効力感を形成することを通じて、意欲や主体性を発揮することができるようになってきた。

ウ　課題

学習に関する項目（授業内容・効果的な学習方法の理解など）は改善が不十分であり、課題が残った。

4　まとめ

長期派遣での学びから、学校の組織開発の理論について実習を通して体験的に理解することができた。また、主体性形成について①生徒の主体性形成の為には成長のプロセスに基づいた段階的な取組が必要であること、②信頼関係の構築と生徒の自己信頼感が主体性を形成するための主要な必要要件であること、③主体性を形成するためには教員による生徒の見取りと承認情報のフィードバックに組織的に取り組むことが有効であることなどを理解することができた。

今後はこれらの知見を活かして、高知県の教育課題である中学生の低学力の問題といじめや不登校などの学校不適応の問題の根本的な解決に向けて組織的に実践を推進していきたい。

《参考文献》

岩渕亜希子　2004『情報社会に関する全国調査中間報告』大阪大学大学院 JIS
太田肇　2013『子どもが伸びる　ほめる子育てーデータと実例が教えるツボ』ちくま新書
梶田叡一　1996『〈自己〉を育てる　真の主体性の確立』金子書房
河村茂雄　2012『学級集団理解に基づく学級経営の必要性と取組』日本生徒指導学会機関誌 11 号 pp. 7-11
瓦井千尋　2012『自尊感情を育むために』栃木県総合教育センター
久我直人 2012『よりよい「学級経営」に大切なこと 子どもの成長を促し、まとまりのある学級づくりをすすめる 優れた教師の省察力』ふくろう出版
金井壽宏・楠見孝　2012『実践知　エキスパートの知性』有斐閣
佐古秀一　1986『学校組織に関するルース・カップリング論についての一考察』大阪大学人間科学部紀要１２　pp. 137-153
佐古秀一　2010『学校の内発的改善力を支援する学校組織開発の基本モデルと方法ー学校組織の特性をふまえた組織開発の理論と実践ー』鳴門教育大学研究紀要第 25 巻 pp. 130-140
佐古秀一・曽余田浩史・武井敦史　2011『学校づくりの組織論』学文社
佐藤学　2000『「学び」から逃走する子どもたち』岩波書店
志水宏吉　2003『公立小学校の挑戦　「力のある学校」とはなにか』岩波書店
志水宏吉　2009『全国学力テスト　その功罪を問う』岩波書店
スティーブン・R・コヴィー　1996『7 つの習慣』キングベアー出版
樽木靖夫・蘭千壽・石隈利紀　2008『文化祭での学級劇の活動における中学生の困難な場面でも頑張る
姿勢への教師の援助介入』日本教育工学会論文誌, 32(Suppl.)pp. 177-180
鍋島祥郎　2003『効果のある学校―学力不平等を乗り越える教育―』解放出版社
前田洋一　2012『〈やる気〉を引き出す・〈やる気〉を育てる』人間教育研究協議会　金子書房
舞田敏彦　2011『学力と自尊感情の相関』データえっせい
文部科学省 2011『生徒指導提要』文部科学省
八並光俊・明神通恭・鈴木裕　2012『総合的な心理教育的アセスメントに基づくコーディネーション型生徒指導に関する実践的研究』日本生徒指導学会資料
山岸俊男　1998『信頼の構造　こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版社

生徒を認め、生徒の自分づくりを促進するツール：大方中学校ドリームノート

"Dream Note"～自分づくり・夢づくり～の構成

1　1年生の自分の手　～手形をとってみよう～　→　3年生の自分の手
2　はじめに
3　大方中学校のスローガン
4　今の自分について知ろう
　①　好きな言葉は・・・
　②　こんな私になりたい
5　今年の抱負の作文を貼ろう　→　1年間を終えての作文を貼ろう
6　定期テストへの取り組み記録を貼ろう
7　1学期の目標を書こう（2・3学期も同じ）
　①　なりたい自分を一言で言うと・・・
　②　なりたい自分になるために、これだけは頑張る！
　③　なりたい自分になるために、勉強ではこれだけは頑張る！
　④　みんなでいいクラスを創るために、仲間のためにこれだけは頑張る！
　→1学期の自分を振り返ろう
　①　頑張った自分をほめてあげよう！どんなことができたかな？
　②　頑張った自分をほめてあげよう！どんなことができたかな？(勉強のために)
　③　頑張った自分をほめてあげよう！どんなことができたかな？(仲間のために)
8　承認シート
9　自分発見シート
　①　先生からのメッセージを読んで、どんなことを感じましたか？
　②　自分には、どんないいところがあることがわかりましたか？
　③　自分のよさを、これからどのように活かしていきたいですか？
　④　いいところ紹介！☆友達のいいところを先生に紹介して下さい
　⑤　保護者の方から　◎　生徒たちへの応援メッセージ
10　チャレンジシート（ボランティアなど）
　①　あなたが、学校のみんなや地域の方のためにやってみたいことは何ですか？
　②　実際にあなたがやってみたことは何ですか？
　③　あなたの取組に対して、相手の方(仲間や地域の方)ほどのような声をかけてくれましたか？
　　または、どのような様子でしたか？
　④　この取組を通じて、あなたにできたことや成長したことを書いて下さい
11　夢の架け橋（1～3年）
　①　昨年1年間であなたはどのようなことができるようになりましたか？
　②　上級学年に進級した今、あなたの将来の夢はなんですか？
　③　1年間を終えた今、あなたの将来の夢はなんですか？
12　自分の未来史を書いてみよう(3年のみ)
　①　1年後～5年後
　②　20歳の自分に言いたいこと

○○　君の良いところ見つけたよ

必ず、君やさんをつける

○月△日　□□　先生より

①成長やよさを具体的に書く

○○君、あなたは数学の時間に自分から△△さんに質問をして、熱心に問題に取り組んでいたね。解答できたときの君の嬉しそうな笑顔がすてきでした。

②教師の思いを伝える

先生は、わからないことをそのままにせずに、一生懸命考えようとする君の姿勢はとても立派だと思います。

③成長への期待を伝える

授業に積極的に取り組めているので、これからもっと数学が好きになってくれる事でしょう。楽しみにしています。

自分発見シート

1・先生方からのメッセージを読んで、どんなことを感じましたか？

僕は、最近数学がわかるようになってきて楽しいです。僕が困っていたら△△さんが、声をかけてくれたので、わからないときは自分から質問できるようになりました。ちょっと積極的になったかな。　～

2・自分には、どんないいところがあることがわかりましたか？

私は

わからなかったら積極的に質問できる　～

といういいところがあることがわかりました。

3・自分のよさを、これからどのように活かしていきたいですか？

私は、これから《　積極性　》を活かして

困っている人がいたら、あまり話をしたことがない人にでも力になってあげたいです。

4・いいところ紹介！　☆友達のいいところを先生に紹介して下さい。

私は、《　さん　》のいいところを紹介します！

△△さんは、いつも近所のおばあちゃんのところの犬を散歩に連れて行って上げています。おばあちゃんはとても助かると言っていました。

保護者の方から

◎　生徒達に応援のメッセージなどをいただけましたらありがたいです。
よろしくお願いいたします。

○○へ

お母さんは○○が最近家でも勉強を頑張っているので嬉しいなと思っていました。今度誰かが困っていたら○○が、自分から進んで助けてあげて下さいね。

母　より

ありがとうございます。

《自分づくり　夢づくりに向けて》　・・・校内ツアー型研修②実施要項

1・目的　①　生徒への承認メッセージの共有を通して、生徒の成長やよさを確認し合う
　　②　メッセージに込められた教師の思いや工夫などを共有し合う

2・日程　6月23日　日曜日まで　掲示（責任者：仲間づくり部会、作業：学年団）
　　7月　5日　金曜日16：20～　研修　3年生教室訪問（各学年部・管理職）

3・内容

①　事前：3年生の担任・副担任
各学級の視点生徒（成長を期待する生徒・成長が見られた生徒）を数名、あるいは成長が見取りにくかった生徒をピックアップする。

各教員1名から2名程度

↓

②　放課後：全教員3年生教室に移動（3−1、3−2の順）・・・**筆記用具持参**

1）3年の【承認シート】を自由に見る（あるいは見ておく）
→　**全教員が集まるまで**

2）担任・副担任（記入者）からピックアップ生徒について説明する
→　**5分×2**

3）質疑および情報交換を行う　→　**5分**

☆　教室を移動して、同様に行う　総計30分

③　各学年の仲間づくり部会教員は自分の学年の先生方に感想を記入をしてもらい、集約しておいて下さい。

4・備考

①　情報交換については以下の2点に限定して行う。

1）生徒の成長やよさに関する情報

2）教師の見取りの質や記述の質（その工夫のすばらしさ）に関する情報

②　保護者の記入は　7月10日　木曜日　までとします。
7月11日　金曜日　の三者面談開始までには生徒の記入・保護者の記入に必ず目を通して面談のリソースにします。

③　2学期前半は2年、1年の順番に行っていきます。

校内ツアー型研修②　記録用紙　　年部会

氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

【承認シート】【自己発見シート】を活用した実践の交流

◇1回目を受けての確認事項

① 承認情報の質の確保

・・・『具体的な記述が生徒を惹きつける』

・生徒の具体的な成長の姿を承認情報としてフィードバックする

② 承認情報の量の確保

・・・『当たり障りのない文章で、無理にかさ増しをしない』

・最低基準を設け、内容の質を落とさないことに専念する
（５行程度を基準とする）

③ 承認情報の頻度の保障

・・・『一定の間隔で、繰り返すことが効果的である』

・適切な間隔で繰り返し承認情報を提供する事が効果的なので、2学期以降は回数を確保する

※　〇〇先生よりの「先生」という記述はしなくてもよい

1・『生徒の成長を見取る（省察）』という点において、他の教員から気付かされたことや参考になったことを書いて下さい。

2・『生徒への承認情報のフィードバックの方法（スキル）』という点において、他の教員から気付かされたことや参考になったことを書いて下さい。

3・その他　皆さんに紹介したいことなどがあれば書いて下さい。